

図書館と／で出会う

短期大学部助教授 安 智 史

数年前の夏、宮沢賢治の足跡をたずねて東京都大島に研究仲間数名とともに赴いたことがある。軽乗用車をつてを頼ってお借りして、元町郊外のこのあたりが賢治に農学校開設を相談した人物（賢治にとってはその妹とのお見合いもかねていた）の住んでいたあたりだろうか、とか、さらには、川端康成「伊豆の踊子」の踊り子たちが働いていたのはこのあたりかと、なるほど野口雨情の歌とはちがつて海に夕陽はおちない波浮の港周辺の、遊廓の痕跡を尋ねたりと、フィールドワークとしての収穫は多々あったのだけれど、ひょっとするとなよりの収穫は、その島の町立の図書館であった。

なにか、郷土関連書籍の特集コーナーでもあれば、と思って立ち寄ったもので、そういう町立の図書館は一般にごく小さく、それほど多大な期待はできないと思っていたのだけれど、それでも、その島で戦前発行されていた新聞のかなりの部分が保存されていて、一般の公立図書館最大の難点はなんといってもこういった定期刊行物の保存がまるでなされていないということなものであるから感激し、こういった同時代資料、もっとありませんか、と、その図書館の職員の初老とおぼしき職員にお訪ねしたところ、ある種、いい年して子どもっぽくよろこんでいる我々（もちろん、図書館で騒ぐなんてことはやっておらず、きつと我々のまわりにそういう雰囲気か漂っていたのか、あるいは図書館好きの天使でも付いていたのならいいのだけれどもっとおどろおどろしいものに取り憑かれていたかもしれない）の様子を察したその職員さんが、それじゃあ、地元でそういうことを調べている方に連絡とって差し上げましょうか、ということで早速、島の中学で教えながら調査研究を続けていらっしゃる時得孝良氏を、紹介し

てくださったのだった。我々は時得氏のまとめた資料の冊子をいただき、また、島の戦前をよく知る古老も紹介いただいたりして、島の海鮮丼や温泉やくさやもよかったのだけれども、なんといってもこの豊かな知的饗応に感激し、結果として上記の諸収穫を得ることができた。

これは、その蔵書規模そのものとは別に、豊富なひとびとの知的ネットワークの結末点として図書館が機能しているという点で心に残った例であるのだけれど、やはり図書館というのはなんといっても、出会いの場なのではないだろうか。新刊の大規模書店や古書の専門書店などにも、又ちがった出会いがあつてそれはそれでとてもいいものであるのだけれど、過去の資料の収蔵庫でもある図書館には、時の流れのなかで醗酵しいまが読み時、といった感じで読者の読解を待ち受けている書籍や定期刊行物の積み重ねがある。

もっとも、そのときどきではたいして重要性が認められず時の醗酵作用によって何十年かして重要性の増すことが多いという例としてもっともわかりやすいであろうコミック誌や女性誌（むしろ「婦人誌」というべきか）は、(NACSIS Webcatで検索しうる限りでの)全国の大学図書館はもちろん国会図書館にも所蔵されていないものが多々あつて、そういう場合は高い入館料やコピー代を払ってでも早稲田にあるまんが図書館や八幡山の太田文庫にでも赴くことになるのだけれど、コミック誌はともかく大正や昭和戦前の婦人誌の所蔵で意外に穴場なのが駒場にある日本近代文学館で、べつに婦人誌でなくとも自分の専攻である近代日本文学の専門図書館なので雑務の合間をなんとかやりくりしたりあるいは長期休暇期にこちらに赴いたりすると、いづれ事情は同じと思われる、やはり日本各地

に赴任している友人知人と遭遇することがある。たまにはこちらの存じ上げない方に声を掛けていただいて恐縮することもあるのだけれど、これまたたとえば夏休みなどに上京し、とにかく費用を切り詰めて安宿に連泊して、限られた時間内に資料を集めようといくつもの図書館を巡り歩いているときなど、豊富な資料に出会う、ということは時にこちらの知の貧弱さを実感させられて打ちのめされたような気持ちにさせられるということでもあり、そういうときには、自分がささいなとはいえ時間と費用をわざわざ割いて成果のおぼつかない徒労を重ねているような気持ちにもさせられて意気消沈し、自分のいまいるこの閲覧室がなんともよそよそしい表情を浮かべはじめていたたまれなくなる場合もある。そういうときに、資料請求カウンターやロビーなどでやはり切り詰めた事情のなかで時間と労力を割いてやってきた知人・友人にたまたま出合ってあいさつを交わし、だいたい彼も我も事情は同じで限定された時間内にできる限り多くの資料を確認しなければならないのでほんの二、三言葉を交わすのみのこともあるのだけれど、お互いちょっと時間を都合して三、四十分ほどその図書館内の喫茶店あたりで雑談とも情報交換ともつかない茶飲み話などする時間ほど気のほぐれてたいしたことない紅茶なりクリームソーダなりが甘露に感じられることはない。そういった図書館でのちょっとした遭遇が自分が目に見えないネットワークにたしかに属しているという確信をあたえてくれて、すると、いったんはよそよそしく、いわば、死者の言葉の膨大な累積の圧迫と思えばじめていた閲覧室が、もういちど、こちらを向いて何か語りかけてくれるような気持ちにもなるのだった。

つまるところ、結局紋切り型の言いまわしになってはしまうのだけれども、図書館とは、比喩的にも文字通りにも、つねに知的な出会いの場であることを、わたくしは自信をもって断言できるのである。

ときどき、これもわたくしに限らず図書館が好きだったり図書館で苦労したりしている(両者はたいてい重なる)かたならついでに考えてしまうように、いまだ自分の知らない、自分

にとっての理想の図書館がどこかにありえないものか、などということをおもったりもするのだけれども、さらに考えていくとそれはかならずしも夢想のみというものでもなく、もちろん完全な図書館というものはないにしても、たとえば、各専門資料性——これは本当に、岩瀬正雄文庫のできる前から、なんでこんな埋もれた大正期の詩人の詩集がいくつも所蔵されてるんだ!?と驚かされ、そのときの私にとってはたいへん理想的な資料をそろえてくれていた豊橋市立図書館、といった、ごく限定されたジャンルでの専門性でもよい——や、建築の構造(と、いう点ではやっぱり安藤忠雄が改築＝完成させた上野の国際子ども図書館が一番印象深かったろうか)、場所、そして、大島町立図書館のような豊富な人的ネットワークなど、それぞれの部分で、すばらしい図書館というのは全国に点在しているのであるし、また、いま豊橋市立図書館のことに言及したけれども、そういう、自分の勤めている図書館の良さに各図書館員はもっと自覚的であってほしいなあと考えたりもし、それは、利用者であるわたくしたち一人一人の責任でもあるのだろう、と思ったりもするのである。と、いうわけでこれからも、図書館と出合ってゆくという(苦しみをふくめた)人生の楽しみは、つきることないであろう。



吉本隆明の出生地近辺をフィールドワーク中に見掛けたポスター